

ヒメコメツキガタナガクチキの生態

江崎 功二郎

日本大学農獣医学部林学科 〒154 東京都世田谷区下馬 3-34-1

Observation on the Metamorphosis of *Synchroa melanotoides* LEWIS (Coleoptera, Synchroidae)

Kôjirô ESAKI

Department of Forestry, College of Agriculture and Veterinary Medicine, Nihon University,
3-34-1 Shimouma, Setagaya-ku, Tokyo, 154 Japan

Abstract The larva of *Synchroa melanotoides* LEWIS (Synchroidae; formerly Melandryidae) was found out from under the bark of *Quercus serrata* stub, and was observed for about six months till the ecdysis into adult. It was suggested that this larva is carnivorous. This supports the idea that the species is not included in the family Melandryidae, which is considered either xylophagous or fungivorous.

はじめに

ヒラタナガクチキムシ科は、日本にはヒメコメツキガタナガクチキ *Synchroa melanotoides* LEWIS 1 種のみが知られ、北海道から九州へと広く分布している (佐々治, 1985). 本種の幼虫の形態については、福田 (1959), HAYASHI (1975), および林 (1980) によって論じられたものがあり、生態については、成虫がフジ、クスギに集まり (野村, 1963), 幼虫がフジ、ナラカン類などの樹皮下に生息する (HAYASHI, 1975; 林, 1980) ことが報じられているが、食性については未知であった。筆者は、本種の幼虫の飼育により、本種の生態について若干の知見を得ることができたので、ここに報告し考察する。

飼育観察方法

1989年12月12日、神奈川県厚木市鳶尾山を訪れた際、コナラの切り株の樹皮下 (地上高 20 cm) より本種の幼虫を多数見だし、これらを持ち帰って飼育を試みた。直径 90 mm, 高さ 60 mm のガラスの透明なシャーレに、木屑や木片 (クスギの腐朽木より得たもの) を底から高さ 20 mm 程度に固く押し固め、さらに 40 mm 程度まで軽く押しつめたものに、これらの幼虫を入れて飼育を始めた。幼虫の成長や生活状態を知るために、ときどき掘り返して観察し、さらにシャーレの外からも観察した。

飼育観察記録

1989年12月13日 10頭の幼虫を飼育容器に入れ飼育を始めた。

1990年3月2日 4頭の生存を確認、一様に成長していた。これらすべての個体は、木片下に

潜み、体の周りに円盤状の空間（長さは体長より多少長く、幅は体幅の 2~3 倍程度、厚さは体のそれとほぼ同じ程度）をつくって静止していた。先に、餌になる可能性があるとして入れておいたカミキリムシ（体長 4 cm）の幼虫は、第 5~6 腹節が傷つき死亡していた。この傷は、本種のうちの 1 頭がつくった空間に接する位置にあった。

1990 年 3 月 24 日 3 頭の生存を確認、3 月 2 日と同じ状態で生活していた (Fig. 1)。死亡した 1 頭は、その状態から明らかに衰弱死か病死と考えられた。

1990 年 4 月 15 日 シャーレの底に蛹室を 1 個確認。

1990 年 4 月 21 日 蛹を確認 (Fig. 2)。掘り返してみるが残りの個体は発見されなかった。

1990 年 5 月 5 日 羽化 (Fig. 3)。

考 察

本種は、ナガクチキムシ科の一員であるように長く考えられてきたが、幼虫や成虫の形態により、異なった独立の科として区別された (佐々治, 1985)。この観察記録から、本種が肉食性もしくは雑食性であることが示唆され、食菌性もしくは食材性と考えられるナガクチキムシ科にはやはり属さないことを裏づけることとなった。以下にその理由の 3 点を示す。

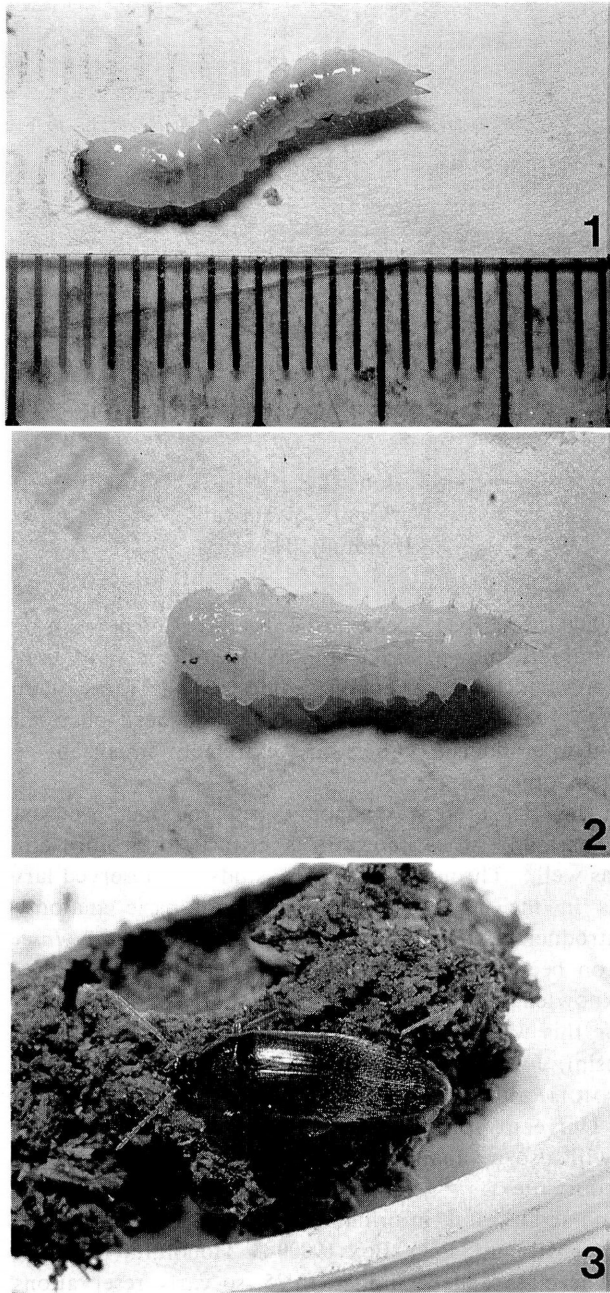
- 1) 本種の幼虫は、肉食性で樹皮下を生活場所とするコメツキムシやアカハネムシなどの幼虫と生活状態が似ている。体の周りに空間をつくることもそのひとつである。
 - 2) 1990 年 3 月 2 日の観察記録で示したように、同居させたカミキリムシの幼虫が外傷を受けて死んでいるのが観察され、その傷の位置は本種の幼虫によってつくられた空間に接していた。
 - 3) 今回の研究では、10 頭中の 9 頭が飼育に失敗したわけであるが、それらの死骸を 2~3 頭程度しか確認できず、共喰いをした可能性が考えられた。
- 以上のことから、本種の幼虫が肉食性をもつ可能性はかなり高い。

謝 辞

本稿を執筆するにあたりいろいろとご指導、情報提供を賜った岩田隆太郎、林 長閑の両氏に厚くお礼申し上げる次第である。

引 用 文 献

- 福田 彰, 1959. ひめこめつきがたながくちき. 日本幼虫図鑑, 485. 北隆館, 東京.
- HAYASHI, N., 1975. On the larvae of Melandryidae (Coleoptera, Cucujoidea) and some related families occurring in Japan. *Kontyû, Tokyo*, **43**: 147-169.
- 林 長閑, 1980. 枯木に生息するヒラタムシ上科 (鞘翅目) の幼虫の同定手引き. 日本私学教育研究所調査資料, (72): 95-147, pls. 1-53.
- 野村 鎮, 1963. ナガクチキムシ科. 原色昆虫大図鑑, **2**: 241-246, pls. 121-123. 北隆館, 東京.
- 佐々治寛之, 1985. ヒラタナガクチキムシ科. 原色日本甲虫図鑑, 358. 保育社, 大阪.



Figs. 1-3. — 1, 終齢幼虫; 2, 蛹; 3, 新成虫 (すべてほぼ等倍率, Fig. 1 の目盛は 1 mm).